

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【10】 百曲街道…六番町から下之一色へ

1 江戸時代の新田開発

江戸時代になって、藩の財政基盤確立のために各地で新田開発が推奨されました。伊勢湾の遠浅の海は干拓には絶好の条件にあり、次々に陸地化されていきました。今日の港区のほとんどと南区の西半分は、江戸時代以降の干拓と埋立によって出来たといえます。(図1)

熱田の西の海岸では、まず1630年代から中島新田が、続いて福田新田が干拓されました。これらの干拓を行ったのは土地の豪農の鬼頭景義です。続いて1646年初代藩主義直は、中島新田の沖、熱田から庄内川に至る約4^{キロメートル}の海岸の新田化を命じました。そして3年後、約4,000^{ヘクタール}

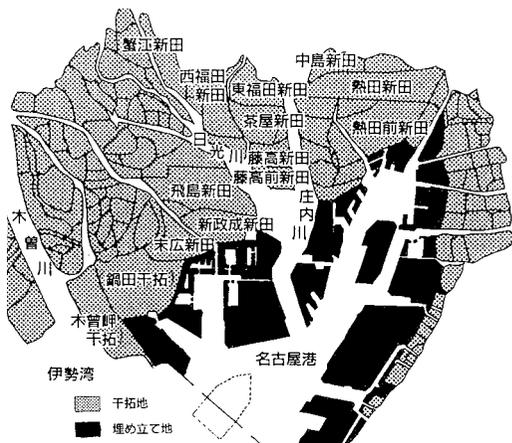


図1 名古屋港付近の干拓・埋立地に及ぶ広大な土地ができ、その2年後には熱田新田が完成し、石高は4,400石余に及びました。熱田から西南に行った辺りに、〇〇番と番号

のついた町名があります。今では1番から11番までですが、昔はその西に33番まで番号がついた地域がありました。この番号がついていた所が、熱田新田です。(図2)

その新田の北側の堤防上に細い道が出来ました。そして人々に歩かれているうちに「百曲街道」と呼ばれる街道になりました。

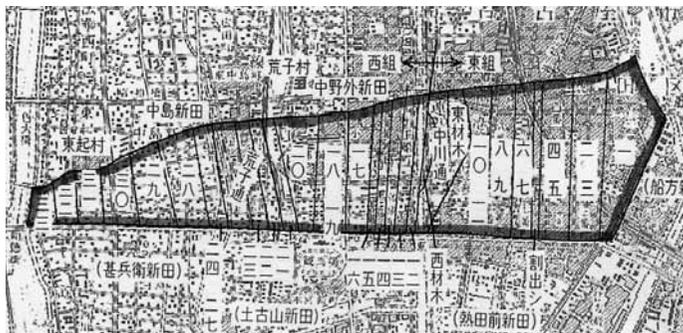


図2 熱田新田の33番割(文献1)

2 堤防を伝った流通の道 …百曲街道

(1) 1等県道 百曲街道

明治12年の県内幹線道路の表を見ると、数本の国道の次に、1等県道として百曲街道の名があります。始点は城下の南、門前町(中区)。終点は今の明德橋(港区)です。飯田街道ですら3等県道という中で1等の位置付けは何だったのでしょうか。当時、国道の東海道は今の東海通でした。百曲街道は明德橋で東海道と合流しており、市内から東海道の西、三重県方面に向かう近道と評価されたからかもしれません。

街道は門前町を出て西に堀川を渡り、江川に沿って南に進みます。六番町の手前で西に向きを変え、昔の堤防の上を中川、荒子川を渡って庄内川に突き当たり、南に少し行くと終点、明德橋です。堤防の上の道がよく曲がっていたために百曲街道といわれたようです。(図3)

(2) 街道の行く先

この道は江戸時代の前期からあったと考えられます。その頃の街道はどこに行く道だったのでしょうか。まずは新田の開発や沖合いの工事に向かう人達の道だったでしょう。しかももうひとつ、この堤防の西端は下之一色になることです。江戸の初めの瀬違いまで庄内川は一色の向こう側を流れていたのです。

下之一色は、この辺りが一柳御厨という伊勢神宮の一種の荘園だった頃からの古い漁港です。そして次第に「万ツ商ヒ物アリテ」といわれる商業拠点になりました。さらに熱田に魚市場ができ、百曲街道は下之一色と市場とを結ぶ道でもあったのです。

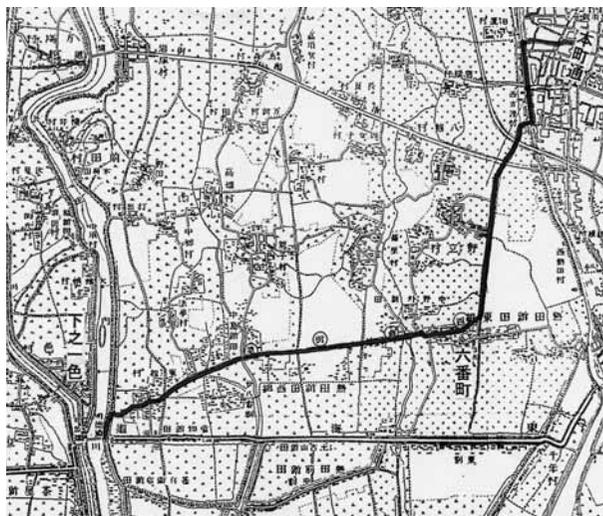


図3 百曲街道(明治21年)

3 六番町から下之一色へ

さて、百曲街道を歩いてみましょう。スタートは地下鉄名城線の六番町駅です。

街道を歩く前に「番割観音」について説明しておきます。熱田新田は基本的には33に区画されました。そして番割と呼ばれた区画毎に西国33観音を模して、それぞれの型に合わせた(千手なら千手の)観音像がまつられました。今では数個がまとめられた処もありますが、百曲街道はこの観音堂を訪ねつつ歩くことになります。(図4)

六番町駅の西北出口を出て、すぐ左の道を西に向かいます。100^m程で、新幹線のガードの下に6、7番の観音をまつた観音堂があります。お堂には弘法大師もまつられ、「南無弘法

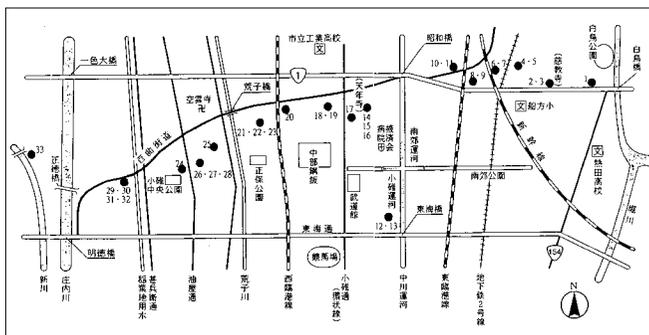


図4 現在の番割観音の位置(文献2)



新幹線の横の6、7番観音堂



左側が南下してきた百曲街道

大師」の旗が目立ちます。さらに200^{メートル}程で8、9番の観音堂があり、そこで道を右に取り、北へ100^{メートル}強行くと、城下から南下してきた百曲街道に出会います。

街道を西に進むと、臨港線跡をくぐった向うに10、11番の観音堂があります。この辺りは道幅も狭く、古い家もあって街道の雰囲気が残っています。しかしその先で広い国道1号と中川運河が交差する所に出て、その前後は街道は消えてしまっています。中川運河は昭和の始めに中川という川を拡幅、掘削しました。大工業地帯を造成するために、区画整理で作られた全国でも貴重な運河です。

*

その昭和橋を渡り、国道の1本南からまた街道が残っています。これから先の観音堂は街道の南に外れ、寄り道が必要です。12、13番は1^{キロメートル}ほど南、14、15、16番は300^{メートル}程南の天年寺というお寺に。17番はその少し西にあります。

広い太平通の前後100^{メートル}程も街道は消えています。その西も1区画は残っていますが、後は

西臨港線まで新しい道に置き換わっています。通りの1本西の道を100^{メートル}程南に行き西に曲ると18、19番の観音堂がありその西、臨港線の手前に20番の観音堂があります。

新しくできた臨港線の西から先は庄内川まで街道が残っています。2本目の道を南に、3本目を西に行った処に21、22、23番の観音堂があります。街道は西に荒子川を渡ります。

*

荒子川を越え、広い道路を渡って少し進んだ北側に、見事な黒松の空雲寺が見えます。この寺は先に述べた鬼頭景義と息子が建てた寺で、景義の墓があります。彼の戒名から「空雲」寺と改名されました。



10、11番観音堂近くの街道

空雲寺から南に300~400^{メートル}で25番の観音堂、その西南に26、27、28番の観音堂、またその西に通りを越えて24番の観音堂があります。いろいろな事情で順序が逆転したのでしょうか。街道に戻ると、細い道が西南に続いています。

また広い通りを越えると庄内用水の支流、稲葉地井筋を渡ります。街道と交差していた何本かの用水も今はこれ一つになりました。少し行くと、道の曲がりこんだ先に徐々に街道沿いの観音堂です。29、30、31、32番の4体の観音像



区画整理でできた中川運河



景義の墓のある空雲寺

がまつられています。この辺りは街道の中でも最も百曲街道らしい所かもしれません。

バス通りを過ぎた所に水田が残っています。昔はこれが一面に広がっていたはずですが、この街道沿いではこれも唯一になりました。街道はくねくねと曲がりつつ、200^{メートル}程で庄内川の堤防に突き当たります。明治の県道は左に曲がって国道の明德橋に行きました。

堤防に上がると直ぐ右に正徳橋(人道橋)があります。その先は下之一色です。実は33観音とひとつ、まだ32番まででした。33番は昔は熱田新田内にありましたが、ある時うち捨てられ、



観音堂の中 御詠歌がはられている



29~32番の観音堂と曲ってつづく街道



下之一色にある33番観音堂

捨てられて下之一色に移されたのです。

正徳橋を渡り、一色の町を横断して新川沿いに出ると、南無観音菩薩の旗に囲まれた、結願の33番観音堂がありました。

4 新田開発と鬼頭景義

新田は土地だけでは出来ません。灌漑用水が不可欠です。名古屋の西部には庄内用水がありましたが、庄内川は水量が一定せず南部の大規模な開発には使えませんでした。藩の命を受けてこの問題を解決したのが鬼頭景義でした。木津用水の建設を助け、新木津用水を作って、庄内川に木曾川からの水を導いたのです。

景義の先祖は弓の名人鎖西八郎(源)為朝といわれます。伊豆から逃れて古渡に住んだ息子の尾頭義次が、紀州の鬼党を退治して「鬼頭」姓を賜ったようです。それから22代、途中で武士から百姓へ転じて八田(中川区)に住みました。

景義は私財を投げうって新田や用水を作り、26年間に2万2千石余の新田を開発したといえます。しかし子孫には美田を残さず、借金を子供に引き継ぎました。そして信仰に厚かった彼は55歳で剃髪し仏門に入りました。

熱田新田の33の観音堂は、堤防の締切りが夢のお告げで成ったことを感謝して、彼が作ったものだといわれています。

秋空や 南無観音の 旗の道

〈主な参考文献〉

- ①市史編集委員会「新修名古屋市史第3巻」(1999, 名古屋市)
- ②日下英之「熱田一歴史散歩」(1999, 風媒社)
- ③鬼頭せきお「鬼頭一族の源流」(1996, 著者)